

綴方学習雑誌『綴方〇年生』の研究

太郎良 信*

A Study of the Monthly Magazine “Tsuzurikata-Onensei”

Shin TAROURA

はじめに

1930年8月、児童対象の綴方学習雑誌『鑑賞文選』（1925年6月創刊）や教師対象の綴方教育雑誌『綴方生活』（1929年10月創刊）の版元であった文園社（社主・清藤幸七郎）が解散となった。その解散に至る原因となった文園社内での争議は「文園社争議」と呼ばれている⁽¹⁾。文園社の解散にともなって、文園社を解雇された小砂丘忠義らは新たに出版社・郷土社を設立し、文園社の事業の譲渡をうけて、1930年9月から『鑑賞文選』の改題後雑誌として『綴方読本』を続刊し、また10月から『綴方生活』をそのままの誌名で続刊していくこととなる。

他方、文園社において、病氣療養中であった清藤に代わって経営を担当していた志垣寛は、文園社解散後、新たに『綴方読本』と類似した綴方学習雑誌に関与していくこととなったとみられてきた。たとえば、中内敏夫は「社外に出た志垣は市販の一般教育誌『教育新人』上に声明を発表して小砂丘一派を難じ、『鑑賞文選』と同じ形式の児童誌の発刊計画を発表した⁽²⁾」と記している。

しかしながら、中内においても、志垣が発表したとする「児童誌の発刊計画」のその後

については不明のままであった。中内が先のようにとらえる際に依拠したものは、小砂丘ら郷土社同人が郷土社の発足に際し『綴方生活』誌上に「文園社脱退」「脱退の理由」「郷土社創立」の3点にわたる経過報告等を明らかにした「郷土社だより」であったとみられる。そこには経過報告のあとに次のように書かれていた。

「その後氏（志垣 - 引用者）は『綴方読本』式の雑誌編集にあたることになつてゐるやうですが、文園社経営中の或種の後始末を私達にさせておきながら、何らかの打撃を私達に与へるにきまつてゐる類似の雑誌発行に参画するなどは、勿論個人の自由をとやかくいふことはできないが、道義上、決して気持のよいやり方とは思はれません。之に対して私達はあくまで実力をもつて対抗していく覚悟でゐます。⁽³⁾」

ここにおいて明らかにされていることは、志垣が「『綴方読本』式の雑誌編集にあたることになつてゐるやう」だということにとどまるものであり、雑誌名をはじめとする具体的なことについての言及はない。

したがって、「郷土社だより」においても、志垣が新たに関与したとみられる綴方学習雑誌については不明なままである。

筆者は、文園社解散後に志垣が関与した綴方学習雑誌が何であったのかについて調査を

*たろうら しん 文教大学教育学部

すすめてきた。それは、文園社解散後において志垣が綴方教育といかなる関係をもったのかということをはっきりとするとともに、同時期の綴方学習雑誌の動向の一端をも明らかにすることを意図してのことである。

調査の結果、『綴方一年生』から『綴方六年生』まで学年別に6種類の雑誌が創刊されていたことが判明した。本稿では、その6種類（のちには4種類）の雑誌を総称する場合においては『綴方一年生』と表記することとし、その『綴方一年生』の実像を編集面と綴方教育観の両面から明らかにしていくこととする。

なお、同時期の他の綴方学習雑誌も散逸がはなはだしいが、『綴方一年生』の場合も例外ではなく、ごく一部の号しか所在が明らかではない。そのため、史料面での制約が大きいが、今後の史料発掘を期待しつつ、現段階で明らかにしうることを記していく。

1 『綴方一年生』の創刊と編集体制

(1) 『綴方一年生』の創刊趣旨

1930年9月に配布されたとみられる『綴方一年生』の創刊を知らせる広告チラシが現存する⁽⁴⁾。それは『綴方四年生』を前面に出したものであるが、それは広告チラシの中に「此の『綴方四年生』の内容をご覧ください。『綴方一年生』『綴方二年生』『綴方三年生』『綴方五年生』『綴方六年生』とも、此の通りの出来栄映えてございます」とあることから見本として添付したものが『綴方四年生』であったためとみられるものであり、実際には『綴方一年生』から『綴方六年生』までの6種類の広告となっている。

『綴方一年生』の版元は教育館。社主は金子富太郎。所在地は東京戸塚町下戸塚285であった。同社の出版物には『教室文庫』全60冊のほか『小学職業指導読本』（計4種）『世界画読本』（計8種）等があり、児童向け教材の出版社であったことがうかがえる。

広告チラシに唱われた『綴方一年生』のキャッチフレーズは「最高権威・新味横溢 合時代の綴方専門雑誌!」「解決!!これだ!綴方教授の実際的困難は一掃された!」「実際教授の副本・自習指導の台本」であり、国語科綴り方の授業の副読本、そして自習教材としての性格をもつものであることを訴えつつ、次のような「八大特色」を挙げている。

一、教育的組織体系

教育新潮を汲んで綴方標準細目を厳輯し、季節と学年と教科書とを斟酌して各月に配当し組織的系統的に学年度を一貫す。

二、綴方教科書代用

綴方実際教授の台本として、また自学自習の台本として、そのまゝ教科書代りに用ゐられるやうに最善の努力と注意が払はれてゐます。

三、編集上の新機軸

従つて編集の上に種々独特の新しい創意を試みました。ほんの一例ですが、毎号投稿用紙を付し、それに多くの文題を提示して創作欲を刺激し、着筆を容易ならしめやうとする用意などは本誌自慢の試みです。

四、内容の真・善・美

本誌に掲載する文話、大家作品、童話、童謡、科学、芸術、修養、伝記、ニュース等は、一切非教育的なるものを斥けて、新時代にふさはしい真・善・美の創造に向かつて邁進してゐます。

五、最廉の奉仕定価

菊判三十二頁で三色版表紙つきの定価五銭は大量生産にして初めて可能な最低の価格であります。

六、全国児童作品満載

日本全国の児童作品 - 文、児童詩、童謡、等一切の作品を満載します。優秀篇の採択はもちろんのことであるが、教育教授上の作業的意味を十分に考究の上編集します。

七、指導批評の懇切

従つて、指導批評に絶大の努力が傾けられ

てゐます。

八、合理的経営方針

極度の廉価を以て児童に奉仕し、お取扱い下さる先生方へは通信其他の費用を弊館で負担する意味で一ヶ年の誌代総額五十円以上の方に年度末に五分の割戻をいたします」

こうした「八大特色」においては、国語科綴り方の授業においてそのまま副教材として用いられることを前面に出してアピールしており、教科書がなかった国語科綴り方の教科書代わりに活用されることを意図していたということがわかる。しかしながら、「教育新潮を汲んで綴方標準細目を厳轄し」と言いつつも「教育新潮」そのものをどうとらえているかということとはうかがえないものであり、とりたてて綴方教育に関する主張を掲げたものではなかったということになる。

(2) 『綴方 年生』の編集体制

編集体制については、広告チラシに「岸辺福雄・小川未明・野口雨情・田中豊太郎先生責任監修」「編輯 志垣寛・橋本憲三・入交総一郎」とある。この監修者や編集者については別添の文書「教育館謹告」においてどのように補足説明がなされている。

「教育館謹告

このたび綴方雑誌創刊に際し、この八月まで文園社を経営『鑑賞文選』を主幹せられてゐた志垣寛氏を編輯に迎へ、『鑑賞文選』創業当時平凡社にあつて参画せられたる橋本憲三氏に、新進児童文学作家入交総一郎氏を加へ、わが児童文学界の最高権威岸辺福雄・小川未明・野口雨情先生並に綴方實際教育の權威田中豊太郎先生を指導監修に仰ぎ、茲に間然する所なき陣容を整へ得ましたことは弊館の限りなき喜びとする所で御座います。全国諸先生のお引立を謹んで願ひ申上げます。(5)

この「教育館謹告」においては、元『鑑賞文選』主幹の志垣寛、元『鑑賞文選』編集者の橋本憲三というように、元『鑑賞文選』関係者が関与するということが強調されてい

る。

志垣は『鑑賞文選』創刊時から顧問の一人であり、執筆者でもあったが、1926年12月から『鑑賞文選』編集に従事する。1927年4月頃に平凡社編集部長に就任することによって『鑑賞文選』の編集から離れたが、1929年4月に平凡社を退社して文園社に入社、病氣療養中の社主に代わって経営を担当することとなった。それは、同時に『鑑賞文選』主幹の位置につくことも意味した。1929年10月に同社から『綴方生活』が創刊されて以降は、その主幹でもあった。1930年8月まで発行されていた『鑑賞文選』の主幹が10月に創刊される『綴方 年生』の編集に関与するということを強調することは読者獲得のうえで有益なことであったとみられる。その「教育館謹告」の後には次のような志垣の「御挨拶」も併せて掲載されている。

「御挨拶

『鑑賞文選』を止めまして暫く皆様と遠ざかるかと思つてゐましたが此のたび教育館で新しく綴方雑誌を創刊するに就いて、是非協力して欲しいとの懇請がありましたので、改めて又お近づきを得たいと思ひ橋本、入交両氏と共に編集に当る事になりました。どうか従前通り切に御愛読を願ひ上げます。

昭和五年九月 志垣寛(6)

このように、志垣自らも「従前通り切に御愛読を願ひ上げ」ている。しかし、志垣が『綴方 年生』の編集に関与するといつても、編集に専念するということの意味するものではない。1930年8月に文園社が解散したのち、志垣はそれまで菊倍判の新聞形式であった『教育新人』(文園社)を改題するかたちで主宰誌『近代教育』(拓人社)を創刊する(7)ほか、著作活動も含め多彩な活動を展開していた(8)。したがって、志垣が編集に関与するという場合にも、社外からの関与であったとみるほかはない。

橋本の場合も、志垣と似た状況がある。橋

本は、1923年6月に平凡社に入社した。『鑑賞文選』創刊の翌年の1926年1月号から1927年2月号に至る時期に平凡社の子会社である文園社の『鑑賞文選』の編集にも携わっていた。文園社が独立社屋をもち、平凡社と文園社の業務の区分けが明確にされることにより『鑑賞文選』の編集を離れたが、1927年4月頃には平凡社を退社した⁽⁹⁾。そして、1930年3月創刊の『婦人戦線』(解放社)の編集に従事していた。『婦人戦線』の主宰者は名義上は妻の橋本逸枝(高群逸枝)であったが、「『婦人戦線』は平凡社を辞めた恵三が独立して始めた、いわば個人出版社の一企画だった⁽¹⁰⁾」と評されているように、事実上は橋本恵三主宰誌というべきものであった。そしてその『婦人戦線』編集のごとは『綴方 年生』創刊以降においても継続して⁽¹¹⁾。したがって、橋本が『綴方 年生』に関与するという場合においても、社外からの編集関与であったとみられる。

入交総一郎は『カナ・トヨトミヒデオシ』『カナ・サイガウタカモリ』(いずれも第一出版協会、1930年)等の著作のほか、『少年少女大偉人全集』(金の星社、1930年)にも伝記を執筆していた児童文学者である。入交も、のちにみるように『綴方 年生』との関わりは極めて少ない。

このようにみえてくると、広告チラシでは「編輯 志垣寛・橋本恵三・入交総一郎」とされていたが、その3人とも同誌の編集に専念するのではなく、社外にあって編集に関与する存在であったといえよう。

2 綴方教育の転換期の自覚

- 第1巻～第2巻 -

(1) 志垣らの編集関与の実態

『綴方 年生』は尋常1年生から尋常6年生までの学年別雑誌であり、体裁は菊判32頁、定価5銭であった。『綴方読本』(郷土社)には尋常科1年生用から尋常科6年生用までの

ほかに高等科用もあったが、尋常科用6種に限ってみれば『綴方読本』と『綴方 年生』とは体裁や定価はまったく同じであった。

『綴方 年生』は1930年10月に創刊されたものとみられるが、第1巻はすべて未発掘である。ただし『綴方四年生』第1巻第1号(1930年10月号)の「要目」は広告チラシに掲載されている。

「りす(表紙)	岩岡とも枝
十月の言葉	
童話 檜の林で	入交総一郎
童話 ねずみの宝物	豊島与志雄
漫画 ワニトリ	田中たけを
読本字引	志本 貞助
少年少女しんぶん	編集 部
文話 行軍	桜井 忠温
つゞりかたのおはなし	志垣 寛
四年生の綴方 / 四年生の詩 / 選評	

この目次によれば、編集者とされていた3人のうち志垣寛と入交総一郎が誌面に登場したことになるが、橋本恵三および「責任監修」者とされていた4人の名前はない。

『綴方四年生』第2巻第1号(1931年4月号)に掲載された広告では、監修者4人は創刊時のままであるものの、編集者は「金子富太郎・志垣寛・橋本恵三・松平道夫・志本貞助」の5人に改められている。新たに加わったのが金子富太郎、松平道夫、志本貞助、外れたのが入交総一郎である。金子は版元の教育館の社主であり、創刊時からの『綴方 年生』の編集発行人である。当初から主幹の位置にあったものが名前を出したということにすぎない。松平は科学読物作家であり、入交の代わりを期待されたものであろう。志本の経歴等は不明であるが、『綴方四年生』第1巻第1号の目次にも「読本字引」の執筆者として名前があり、常連執筆者の一人とみられる。

『綴方四年生』第2巻第1号の目次は、次の通りである。

「花見(どうよう)	野口雨情
-----------	------

めぐりあひ(おはなし)	加藤武雄
雀の子(児童劇)	西村善次郎
石をやつたので(おはなし)	外国読本
綴方読本(第一課)	橋本憲三
少年少女しんぶん	
読本勉強	志本貞助
四年のどうえう	野口雨情選
四年生のつゞりかた	志垣寛選
注意と同情(選評)	松平道夫 ⁽¹²⁾

この目次にあるように、志垣は「四年生のつゞりかた」の選をしている。朝露の美しさにひかれて手に取ったときの冷たさと洗顔の際の水の冷たさを比べて「朝つゆは水よりつめたい」ことに気づいたことを書いた「朝つゆ」と題する綴方の評において次のように述べている。

「子供の知的発動の一例として、この文は価値あるものです。この知的発動をこのまゝで終らせるか、いかに導くかといふ事は深く考ふべきことゝ思ひます。本誌で強調してゐる綴方即生活 - すなはち『綴方は国語科としてのみでなく、児童生活の全部である意味に於て理解さるべきだ』といふことを、この文のやうな場合においても考へたいものです。⁽¹³⁾

この評によって、綴方を国語科綴り方としての面からばかりでなく、子どもの知的な関心を育てる機会としても生かしていくものとする志垣の綴方観の一端をうかがうことができる。そして、志垣は、こうした綴方の見方を「本誌で強調してゐる綴方即生活」という表現でもってそれが『綴方 年生』の綴方観であるとしている。

しかし、志垣はこの号あるいは次号を最後に『綴方 年生』の編集から離れたものとみられる。2ヶ月後の『綴方三年生』『綴方四年生』『綴方五年生』『綴方六年生』それぞれの第2巻第3号(1931年7月号)の4冊には志垣の関与したあとはみられないためである。ちなみに、その4冊の綴方の選者は、「三年生

のつゞりかた」は松平道夫選、「四年のぶん」は橋本憲三選、5年の「児童文叢」は広津和郎選、6年の「児童文」は宇野浩二選であり、『綴方四年生』第2巻第1号で志垣が担当していた綴方の選は橋本憲三が担当したことがわかる。

(2) 童謡と児童詩の併存

『綴方四年生』第2巻第1号には、監修者の一人・野口雨情が童謡を発表しているほか、「どうえう(童謡)」の選者として登場している。野口の選による「推奨」作品は次のものである。

「火事のかね

香川県大川郡白鳥本町小学校 岡部 満
ゴンゴンゴンとノなりだした。

あわれさうなノこえ出してノしやうぼうノ
こいよこいよとノよんでいるノ火事のかね

【評】火事のかねを人格化し、それに同情して、哀切に歌つてあります。純真な子供心の流露です。⁽¹⁴⁾

この作品は火事を知らせる半鐘を擬人化したものであり、評もそこをとらえて「純真な子供心の流露」と讚美している。作品も評も大正期の童心主義を引き継ぐものであり、欄の名称通り童謡であった。

ただし『綴方 年生』すべての学年が「童謡」という語で統一されていたわけではない。『綴方 年生』第2巻第3号のうち、3年生は「どうえう」欄で野口雨情の選、4年生も「どうえう」欄で野口雨情の選、5年生は「児童詩」欄で高群逸枝の選、6年生は「児童詩」欄で百田宗治の選となっており、「どうえう」と「児童詩」が併存している。こうした併存の理由が、中学年までを童謡、高学年を児童詩と見たことによるのか、あるいは選者によって用語が異なるのかは前後の号の発掘を待つ他はないが、欄の名称と児童作品が必ずしも一致してはいないということもまた事実である。

たとえば、『綴方四年生』第2巻第3号に

おける野口の選による「どうえう」欄において同月の2位とされた作品は次のものである。

「首きり

福岡県三池郡三池小学校 岡本末弘

君のお父さんは / 首がきれたかと / 友だちに
きくと / さびしいこゑで / うんと答へた / 会
社のえんとつが / 青空にそびえてゐる。

【評】首の問題を歌つたのはたいへん適切だ。一種古い気分の漂ふてゐる児童詩の中に一脈の新しさを添へるものだ。(15)

欄の名称が「どうえう」であるが、評者(16)は「児童詩」という語を用いて高い評価を加えている。続けて、次の作品も掲載されている。

「ふけいき

福岡県三池郡三池小学校 東 国雄

夕はんをたべると / お父さんはあほい顔で /
しをしをと立ちあがられた / 茶の間へくると /
やつぱり皆 / ふけいきの話ばかりである /
姉さんが / おひつの中をかする音がする

【評】ふけいきはこたえますね。いゝ詩です。(17)

このように、「どうえう」欄に児童生活詩というべきものが掲載されて、高い評価を得ているのである。もっとも、同じ欄には「童謡」という名のままの作品も併せて掲載されていることもまた確かなことである。

「からす

栃木県芳賀郡西高橋小学校 水沼スミエ
お日様西にしづむころ / からすがあかあと
んでつた / 二ひきはおくれてとんできた / ど
こへ行くかと見てみたが / 遠くへ行つてわ
からない / あとの二匹はかはいさうに / くら
くなつたらどうしやう

【評】すなほな歌だ。純真な子供心の流露だ。歌ひ出しがいい。(18)

「純真な子供の流露」という評語は、先にみた「火事のかね」の評の際にも用いられていたことばであり、野口が児童の童謡を見る

際のキーワードであったとみられる。

このようにみると、童謡と児童詩が、その呼称においても、また児童作品においても併存していたことがわかる。しかし、童謡から児童詩へ移行する時に来ているということが自覚され始めていたとみられる面もある。たとえば、『綴方五年生』第2巻第3号で高群逸枝が選をしたとされる(19)「児童詩」欄において最高の評価(「三等」)を得た作品は次のものである。

「春

香川県三豊郡吉津小学校 新延トシコ

野原に花が / 咲く時に / 中で二人の / ギやう
ちやんが / つみ草つんで / 歌うたひ / 青いお
空を / ながめてた

【評】牧歌的な匂いの高い作品ですね。調子が少し古い気がする(20)

「児童詩」欄ではあるが、掲載された作品は七・五調の童謡としか呼べないものであった。評者は「少し古い気がする」と評しているが、それは他の作品を評する場合にもみられることである。たとえば「たつしやな詩だ。が、もうこんな詩は、何だか鼻につくやうな気がする。『一番星……』いいにはいいが、どうもあまりに歌ひ古されてゐる(21)」「これも感覚詩として申し分なし。然し、時代はもつと新しい詩を要求してゐる(22)」というように、作品が「古い」ことをしきりに指摘しているのである。

同号の編集者は橋本であった。その橋本は「文とモデル」と題した一文において、「写実主義文学が盛んになつたと同時に、詩でも感覚的の詩が頭をもたげたが、感覚ばかりが実感ではない」などと高群の名による児童詩評と重なることを述べつつ、さらに広げて「いまは単にこれのみでなく、我国の児童綴方教育に再吟味すべき時が来てゐるのではあるまいか(23)」と、綴方教育の転換期にあるという認識を示していた。

3 花鳥諷詠の「作文」の賞賛 - 第3巻 -

(1) 発行人・編集体制の一新

第3巻は1932年1月号で改巻されている。これは『綴方五年生』第3巻第3号が1932年3月号であることによって推察できることである。その『綴方五年生』第3巻第3号に即してみると、発行人が変更されていたり、雑誌の種類が減少したり、編集執筆陣の顔ぶれが大幅に変わるなど、いくつもの変化がおこっていることがわかる。

まず、発行人の変更についてみる。

『綴方五年生』第3巻第3号の奥付によると発行人等は、次のとおりである。

「編集発行兼印刷人 東京市小石川区高田老
松町六〇 酒井一二六
印刷所 東京市小石川区高田老松町六〇
教育館印刷部
発行所 東京市小石川区高田老松町六〇
教育館⁽²⁴⁾」

発行所の社名そのものは教育館のままであるが、社名以外は、編集発行人も所在地も新たなものとなっている。教育館が『綴方 年生』とともに前社主の金子富太郎から酒井一二六に譲渡され、それにもなって他の面についても変更がなされたものとみられる。

雑誌の種類の変化については、『綴方五年生』第3巻第3号の広告にあるのは『綴方三年生』から『綴方六年生』までの4種類だけで、『綴方一年生』『綴方二年生』はないことから推察される。

編集面での変更は、『綴方五年生』第3巻第3号の表紙の上部に「東京高等師範学校附属小学校教官田中豊太郎先生監輯」と掲げられたことである。田中は、前述したように創刊時の広告チラシに「責任監修」者4人のうちの1人に含まれていたが、第2巻までの時期においては具体的な関与は確認できない。そのような田中がここで監修・編集の両面にわたって前面に出されることとなる。それは

創刊時に示されていた「責任監修」4人の体制が名実ともに解消されたということの意味するものであった。また、『綴方四年生』第2巻第1号の広告で編集陣が「金子富太郎・志垣寛・橋本憲三・松平道夫・志本貞助」とされていたが、これも解消されている。

したがって、『綴方 年生』第3巻は、誌名や巻号、版元の教育館という名称に関しては第1巻・第2巻のものを継承しているものの、それ以外の面では一新されており、『綴方 年生』は事実上第3巻でもって再発足したものとみてよい。

(2) 表現技術への関心

『綴方五年生』第3巻第3号(1932年3月号)の目次は次のとおりである。

「菜の花(童謡)	三木露風
意味のある文(文話)	田中豊太郎
鑑賞文選	
ポチ 二葉亭四迷 / はげの由来(無署名) / 漁村の春(無署名)	
ガリマ(読物)	室生犀星
入選綴方	田中豊太郎選
入選童謡	編集部選
記者より	(無署名) ⁽²⁵⁾

田中は「意味のある文(文話)」において、「綴方は、物の見方、味はひ方のけいこだと思つて下さい。そして、あなたの見る事、する事、聞く事の中から、何かの意味を見出す事が第一の仕事だといふ事を十分に考へてみて下さい⁽²⁶⁾」とし、綴方においては生活経験の中に意味を見出すことが大事であることを強調している。その田中は「入選綴方」の選も担当している。しかし、その選評においても前述のような主張が貫かれているわけではない。同号における田中の評のうちでもっとも長いものを示すと、次のものとなる。

「『つかれてしまつた私は立どまつた』この書き出しに敬服する。文はかきだしがなかなかむつかしいものです。かきだしを、どういふ風にすればいゝかといふことに二日も三日も

苦心する人もあるといふことです。文の書き出しはランニングのスタートみたいなもので、実に大切です。選者は、毎月何千といふ文を見ますが、書き出しの二行をよんでみればすぐその文のよしあしがわかります。『文の書き出し』のことについては、そのうち『文話』としてのせませす。とてもこの欄では十分のことはかけませんから。(27)

これは「えらい遠足」という綴方に評として付けられたものであるが、その綴方を書くなかで書き手が「意味を見出」したにかかわる評はない。田中自身が「書き出し」に関心を抱いていること、さらには、その「書き出し」で「文のよしあし」に見当がつくということを表白しているものであり、評の観点が表現技術に向けられていたことを示すものである。

また、『綴方五年生』は第2巻の時期には「児童詩」欄が設けられるようになっていたが、第3巻に至って編集部選による「入選童謡」欄が設けられている。そこにおいてただ1点「賞」とされた作品は次のものである。
「夕方

北海道夕張第二小学校 江川 諒
お日さま / 山へかへります / からすも / かあ
かあ巢へかへる / ぼうやも / なかずにかへり
ませう(28)

評は付されていないが、中村雨紅の童謡「夕焼小焼」を想起させるような、文字通りの童謡に「賞」を与えたことは、編集方針が児童詩から童謡へと逆戻りしたことを象徴的に示すものであった。

さらに注目しておかねばならないのは、「鑑賞文選」欄に作家の文章の他に、無署名の児童文風の文章が掲載されていることである。こうした文章の掲載は、このあとも「よいぶん」(『綴方五年生』第3巻第5号)や「もはんぶん」(『綴方四年生』第3巻第8号)の欄に継続されていく。子どもの綴方であるかのような大人の文章を模範文として提示し

て、その模倣をさせようとするのも前時代的なものであった。

ところで、こうした「東京高等師範学校附属小学校教官田中豊太郎先生監輯」という編集体制も数ヶ月しか続かなかつた。『綴方五年生』第3巻第5号(1932年5月号)になると、田中の名前が表紙から消えるとともに、本文にも田中の関与はうかがえなくなっている。

(3) 花鳥諷詠の作文の奨励

『綴方五年生』第3巻第5号では、前述したように表紙から田中の名前が消えている。その田中の名前の代わりに他の名前や団体名があるわけでもなく、また「月号」の表記もなく、表紙絵のほかには「綴方五年生」という題字と「東京 教育館 発行」という版元を示す文字があるのみである。本文や広告にも編集体制について明らかにしたものはない。編集後記にあたる「記者だより」の署名者は「酒井生」であり、社主の酒井一二六とみられるが、酒井は本文には登場していない。児童文の選評者や記事の執筆状況から編集者を推察すると、寺尾正義とみられる。その寺尾の経歴等は未詳であるが、「少年物語太郎の栄冠」(『綴方五年生』第3巻第5号)や「奴隷とライオン」(『綴方四年生』第3巻第8号)を書いていることから判断すると、児童文学者であったとみられる。

『綴方五年生』第3巻第5号の目次は次のとおりである。

「渡しのおぢさん	石坂静江
作文が好きになれ	松田 啓
常識問答	
つばめ集(俳句)	三重県鳥羽小学校生徒
蝶(鑑賞文)	千葉春雄
よいぶん	
茶碗売り(無署名) / めだか(無署名)	
笑話	
太郎の栄冠(少年物語)	寺尾正義
燕が後悔した話	北村寿夫

入選作文
選評
記者だより

編集部選
寺尾正義
酒井⁽²⁹⁾

この目次にみられるように、児童文を「作文」という用語でとらえている。小学校においては1900年以降「綴り方」と呼称しており、「作文」は中等学校以上での用語となっていた。誌名にも「綴方」が用いられているなか、あえて「作文」という用語を採用しているということになる。そして、それは用語の問題にどまらず、児童文の見方にも反映している。たとえば、編集部選による評には「朱筆を入れる余地がない程まとまってある。後生恐るべき文章家⁽³⁰⁾」などあり、評の観点は文章としての完成度をみるところにあったのである。個々の作品の末尾の評とは別に寺尾正義の署名による「選評」もあり、「春」という児童文については「『春』はよく出来てゐます。春のさん美詩といへるぐらゐになだらかに春をたゞへる心が流れ出てゐる⁽³¹⁾」と絶賛している。ちなみに、その「春」の全文は次のものであった。

「春

京都府豊栄校 林 靖

春がきた、僕等の世界の春がきた。野も山も青々として、いかにも春らしく静かだ。小鳥はさえずり、草木は花を咲かせ、人はおどり廻り、けだ物は走り廻る。なんでも春は嬉しいからだ。太陽の光はやんわりとして、その光を受ける物はみんなのんびりとしてゐる。野原に出ればつくしが顔を出し、すみれやたんぽぽ、れんげなど花を開く、桜は自分ばかりの、この世だと言はないばかりに咲きほこつてゐる。その中を人々は歩き廻り、桜を見ながら、酒をのみ、御ちそうを食ひする。小川はおだやかに水を流し人は魚をつりする。あゝ楽しい春。⁽³²⁾

花鳥諷詠の美文調の典型的な「作文」であり、評者の綴方観が前時代的なものであることを示すものであった。

このような花鳥諷詠の文を評価する選評は、その後も続いている。『綴方四年生』第3巻第8号(1932年8月号)にも編集部選「入選作文」欄があり、そこでも寺尾が「選評」を書いている。そこでは「扇ヶ浜はずいぶんけしきのよい所だ。あの青い長い松原に白い砂浜、青々とした海、つきでた天神崎、瀬戸崎、まるで糸にかいたやうだ⁽³³⁾」で始まる児童文「扇ヶ浜」について「殆ど名文と云つてよい。これを読むと、作者がいかにか扇ヶ浜をなつかしみ愛してゐるかわかる。波の音、松風のそよぎ、皆作者とともにある。この味は海岸ばたに育つた者でなければわからない⁽³⁴⁾」と賞賛している。

このようにみえてくると、第3巻の時期の『綴方 年生』の編集者の綴方観は「作文」時代のそれであったといえよう。

4 生活表現の奨励 - 第4巻 -

(1) 『綴方』への統合

第3巻の時期に『綴方三年生』『綴方四年生』『綴方五年生』『綴方六年生』の4種類となっていた『綴方 年生』は、1933年9月号から1冊に統合され、統合後の誌名は『綴方』とされた。このことについて、誌面では次のように説明している。

「『綴方』は九月号から各学年共通の一冊になりました。一年生から六年、高等科の皆さん迄この一冊で充分に綴方が上手に成る様にこしらえたのです。⁽³⁵⁾」

一冊で全学年に対応すると言いつつもページ数は従来通りの32ページであり、定価は従来の2倍の10銭に改められている。これは、一冊への統合が主として経営的な理由によることを示唆しているとみてよいであろう。

『綴方』第4巻第10号(1933年12月号)の表紙上部には「児童綴方研究会後援」という文字が掲げられている。しかし、それがいかなる研究会であるのかについては明らかにされていない。第3巻の時期に編集に関与して

いた寺尾も誌面から去っており、いわば匿名で編集されたものということになる。

(2) 生活表現の奨励

『綴方』第4巻第10号には、編集者の綴方観うかがわせるものとして、無署名の一文「綴方の好きなみなさんへ」がある。そこでは、次のように述べられている。

「綴方が上手な人は、心も立派なのが普通です。綴方といふのは、たゞ、手先で出来る仕事ではないのです。友達に親切な人、家でよくお手伝ひする人、草花や虫を好きな人がほんとうによい綴方をかくのです。こゝろの美しい人、やさしい人がよい綴方を書くのです⁽³⁶⁾」

よい生活からよい綴方が生まれるという生活表現主義の綴方論であり、これも1930年代における綴方論としてはとりたてて斬新なものではない。しかし、第3巻の時期に花鳥諷詠の美文調の綴方を賞賛していたことを顧みるならば、大きな変化であった。

文話では、前田光雄が「日記をかきなさい」において「その日の色々なことのうち、一番大きなこと、大事なこと、面白かつたこと、かなしかつたことなど一つ二つ書けばよい⁽³⁷⁾」と述べ、生活から取材する手だてを示している。

綴方は編集部選「児童文」に掲載されているが、そこには「あかちゃん」「水族館とべん天様」「初雪」「かこひ小屋」というように自分の生活に取材したもののほか、社会に目を向けた「今の世の中」、動物の生態に目を向けた「動物の色々」などであり、花鳥諷詠や美文調のものはみられない。評においても、子どもの生活に共感しつつ、さらに生活から取材する手だてに対する示唆がなされている。たとえば、尋常2年の児童の綴方「あかちゃん」に対する評はつぎのものである。

「かはいいいあかちゃん、にこにこわらつて、キヨコさんとあそぶあかちゃん、あかちゃん、とてもすきですね。そのすきでたまらな

いところがよくかけてみます。あかちゃんがなくときのやうすなども、よくかけました。あかちゃんのからだつきや、いつものやうすや、おかあさんにだかれるところなどをよくみて、みんなかくと、このつどりかたはもつといゝものになります⁽³⁸⁾」

こうしてみると、『綴方』は、子どもがその生活を表現することを奨励する編集に改められているということになる。

5 生活綴方教育論の反映 - 第5巻 -

(1) 郷土社同人らの編集関与

『綴方』第5巻第10号(1934年12月号)の表紙にも「児童綴方研究会後援」の文字があり、表紙では1年前の『綴方』第4巻第10号と変化はみられない。また、編集体制が示されているわけでもない。しかし、目次をみると、執筆者の顔ぶれが一変している。

「年の暮	大坪杏平
夜話(童詩)	門脇英鎮
文の研究 綴方の目のつけどころ	
	井野川潔
白いマント(童話)	峰地光重
橋の上の馬(諸国民話)	沖すゝむ
狼をだましたお爺さん	小川未明
一を十二倍するのと十二を一倍するのと	
- 学芸会用脚本 -	久保田萬太郎
児童詩	
児童文	編集部選 ⁽³⁹⁾

この目次に登場する執筆者のなかには『綴方生活』(郷土社)や『綴方読本』(郷土社)の関係者が3人含まれている。

門脇英鎮は詩人。『鑑賞文選』の編集者を経て1930年の郷土社発足後にも郷土社同人として『綴方読本』を編集していたが、1931年に家庭の都合で退職し、1934年の時点では大阪で自営業に従事していた。

井野川潔は、1934年当時はフリーの雑誌編集者。1931年に郷土社に入社し『綴方読本』の編集者であったが、経営困難により郷土社

が小砂丘の個人経営となった1931年9月に退社した。郷土社同人として名前を連ねることはなかったが、事実上は郷土社同人であり、『綴方生活』の執筆者の一人であった。

峰地光重は、鳥取県上灘小学校の訓導兼校長 郷土社同人であり『綴方生活』『綴方読本』の常連執筆者であった。

『綴方』に関与した郷土社関係者は他にもいた。『綴方』第5巻第10号の児童文評のなかに「読本（国定国語教科書のこと - 引用者）のまねをして手紙を書いても、ほんとうに気持がよく表はれた文にはなりません。手紙は『綴方』の十月号に野村芳兵衛先生のお話に出てみえますから、よくよんで考へて下さい⁽⁴⁰⁾」とあり、『綴方』に野村芳兵衛が文話を執筆していたことが示されている。この野村は、池袋児童の村小学校の主事であるとともに郷土社同人であり『綴方生活』『綴方読本』の常連執筆者であった。

前述のように、志垣が『綴方 年生』の編集に関与することに対して郷土社同人は「実力をもつて対抗していく覚悟」を表明したが、そのとき門脇・峰地・野村の3人も郷土社同人として名前を連ねていた。ところが『綴方 年生』の後身の『綴方』に郷土社同人らが執筆活動をしているということとなる。また、郷土社からは『綴方読本』も発行されていた⁽⁴¹⁾のであり、類似誌に郷土社同人が協力をしている形となっているのである。

こうした事態に対して、郷土社同人の田川貞二が、郷土社同人らが『綴方』に執筆していることに関して不快感を小砂丘に伝えたものとみられ、小砂丘は田川への返信において次のように書いている。

「教育館の『綴方』とかは僕は此頃見てないので知らぬ。井野川はここで多少の口すぎをしてゐるのではないかと思はれる節がある。野村君が出してゐるとすれば、井野川君たちからたのんでゆくやうすすめたものだらう。とにかく、みんな今頃綴方をやつてゆくとす

れば、旧の文園社時代のよしみで、あつちへひつぱりこつちへひつぱられてゐる状態だから。現在出てゐるかどうかしらん。^(註42)」

小砂丘は『綴方』を見ていないと述べつつも、井野川が『綴方』の編集に関わっているためであろうとみている。ただ、そのことがそれほど問題があることもみていない。同時期に『綴方生活』は綴方学習雑誌の批評の連載を始めるが、その対象は『赤い鳥』（赤い鳥社）『綴り方倶楽部』（東宛書房）『佳い綴り方』（文録社）の3誌であり、『綴方』は含まれていなかった⁽⁴³⁾。小砂丘が田川宛書簡で「現在出てゐるかどうかしらん」と述べていることをあわせて判断すると、『綴方』は気にするほどのものではないという評価があったものとみられる。

（2）生活綴方教育論の反映

小砂丘が推察したように、井野川が『綴方』の編集に関与していたものとみられる。

井野川は「文の研究」欄において「綴方の目のつけどころ」と題して、上段に児童作品を掲載し、下段に評を書いている。こうした「文の研究」という編集スタイル自体『綴方読本』1930年9月号から始められたものであった。

また、井野川は同時期の『綴方生活』誌上に、児童文の評価にかかわって「われわれが事物（綴方もその一つだ）を見るのに、いろいろの観方をすることは差支へない。だが、それだからといつて、ゴムのやうに伸縮する尺度で児童文を計られてはたまらない」として「児童文の評価は価値発見に一定の基準を要求する。 - 対象を如何に発見し、如何に描写するか」を論じていた⁽⁴⁴⁾。

こうした井野川の問題意識が『綴方』誌上の「文の研究」における児童文評にも反映している。そこで取り上げられているのは、「此の頃は雨つゞきでゐなかの人はどんなに困つてゐるのでせう」という書き出しで始まる尋常5年の綴方である。井野川は「雨つゞきに

困つてゐる稲や蚕をつくつてゐる人のことを考へて書いた文ですが、題材はよいけれど、うまく書けてゐません」として、次のような批評をしている。

「『此の頃』の文を、よい文に直すには、まづはじめに、雨がふつてゐるので困つてゐる人が多い。その人たちのことを考へて書かうと、しつかりときめること。

それには、第一に、今年の雨はどんな風であつたか。自分ではその雨をどう考へてゐたか。他の人はどう言つてゐたか。

次に、近ごろの雨について、お百姓のこと、稲や蚕のことを、よくわかるやうに、お父さんやお母さんにきいてみて、この雨がどれほどお百姓を困らせ、苦しめてゐるか、よく考へてみること。(45)」

井野川は、子どもに対して、綴方を書く目的を明確にもつこと、そしてそのために調べたり考へたりすることを求めている。これは、当時の生活綴方教育のなかで論議がおこっていた「調べる綴方」の問題やリアリズムの問題を念頭においたものであった(46)。

「児童詩」欄においても、落ち穂拾いを書いた「穂ひろひ」、人参掘りを書いた「ねんじん」、そして次のような「木工場の汽笛」など、生活に取材した詩が掲載されている。

「木工場の汽笛

北海道十勝帯広柏小学校 池高芳三
急に木工場の汽笛が鳴つたので

はつと思つた

あれはきつと九時の休みのぼうだらう

お父さんはいま

腹にまいてゐる押皮をといて

やすまれてゐるところだらう

【評】押皮といふのは、木材を鋸へ押しやゑる腹へあてる革帯のことださうです。働いてゐるお父さんを思ふ心があらはれてゐてうれしい。池高君はお父さんの働いてゐるところも見たことのあるだらうから、その思ひ出なども書いてみるといふですね。(47)」

こうした誌面をみると、『綴方』に掲載される児童作品や評が、同時期の『綴方読本』や『綴り方倶楽部』のものと同様のものとなっていることがわかる。

井野川が『綴方』の編集に関与することとなる契機は、井野川の「口すぎ」の手段としてであったかもしれない。しかし、井野川が関与することによって、『綴方』誌上に同時代の生活綴方教育の動向が反映したということとなるのであり、綴方教育の発展の上で積極的な意義をもつものであった。

おわりに

1930年10月に『綴方 年生』として創刊され、のちに『綴方』に改題された綴方学習雑誌が1934年12月まで少なくとも4年間余り存在したことが確認できた。『綴方』のその後については未詳である。存在が確認できた4年間余りの時期の『綴方 年生』『綴方』に関しても現本が確認できたのは文字通り一部の号にとどまっている。そうした制約のため、いくつかの点と点をつないで全体像を見渡そうとする試みにとどまっている。そうした限界をもちつつも、本論文で明らかになったことは次のようなことである。

第1に、文園社解散後に志垣が関与した綴方学習雑誌は『綴方 年生』(教育館)であったということである。それは志垣の経営による雑誌ではなく、志垣は社外からの編集協力者の一人であった。そして、それら、実際には創刊から半年余りでおわつたものとみられるということである。

第2に、『綴方 年生』は、国語科綴り方の副教材としての性格をもつものとして企画されたが、綴方教育のありようについて明確な主張をもつものではなかったということである。編集者の異動が激しいこともあり、綴方や児童詩の見方において一貫性をもちえなかったため、同誌が同時代の綴方や児童詩の教育において指導的な立場をもつことはでき

なかったものとみられる。しかしながら、編集方針が一定しないにもかかわらずこうした雑誌が商業誌として少なくとも4年あまりのあいだ存在しえたということは、国語科綴り方の副教材としての需要がそれなりにあったということを示すものでもある。そして、それは、ある意味では同時代の綴方教育の状況が混沌としていたことを間接的に示すものでもある。

第3に、その発行が確認される時期の終わりの段階で、『綴方生活』関係者が編集執筆に関わっていたということの意味である。井野川が関わることによって、結果的には『綴方』誌上に同時代の生活綴方教育の考え方が反映することとなったということである。このことがその後の『綴方』誌上の児童作品にいかなる影響を与えたのかについては、『綴方』のさらなる発掘に待つほかはない。

註

- (1) 文園社争議の経過については、太郎良信『生活綴方教育史の研究』(教育史料出版会, 1990年) 41～68頁参照。
- (2) 中内敏夫『生活綴方成立史研究』(明治図書, 1970年) 571頁。『中内敏夫著作集』(藤原書店, 2000年) 122頁にも同じ叙述がある。
- (3) 「郷土社だより」『綴方生活』1930年10月号, 95頁。
- (4) 新聞1ページ大の印刷物。小砂丘忠義文庫所蔵。
- (5) 菊判大の1枚の印刷物。小砂丘忠義文庫所蔵。
- (6) 同上。
- (7) 『教育新人』(文園社, 定価5銭)は『展望』(文園社, 定価5銭)を改題継承したものであった(「文園社消息」『綴方生活』1930年1月号, 96頁)。その『教育新人』をさらに改題して『近代教育』としたことは「昭和四年六月二十九日第三種郵便物認可」が継続して

いることで裏づけられる。

(8) 志垣は、1932年に記した近況報告において「昭和五年九月、文園社の仕事を解散しましてからこの方、満二箇年余全く浪人生活です」(志垣寛「近況一束」『近代教育』第3巻第9号, 1932年11月, 3頁)と、出版社等に属することなく過ごしてきたと回顧している。2年間に関わったものとして具体的に挙げられているのは、新教育協会、郷土教育連盟、教育評論家協会、主宰誌『近代教育』と著作活動である。ちなみに『綴方 年生』についての言及はまったくない。

(9) 太郎良信『鑑賞文選』と小砂丘忠義(二)、『土佐綴方茶話』第6号, 高知県大豊町小砂丘忠義記念館, 2001年)参照。

(10) 栗原葉子『伴侶』(平凡社, 1999年) 153頁。

(11) 『婦人戦線』は1931年6月号まで発行された後、廃刊となる。

(12) 『綴方四年生』第2巻第1号(1931年4月号) 1頁。

(13) 同上誌同上号, 31頁。

(14) 同上誌同上号, 23頁。

(15) 『綴方四年生』第2巻第3号(1931年7月号) 26頁。

(16) この評は野口の評としては唐突なものであり、この部分は編集者の橋本憲三による可能性があるため、あえて「評者」と表記する。児童詩の「古さ」に言及しているところが後述する『綴方五年生』第2巻第3号(1931年7月号)における高群逸枝の名による評と通じるところがあること、さらにその高群の名による評が橋本によるものである可能性があることによる。(19)も参照。

(17) 『綴方四年生』第2巻第3号, 27頁。

(18) 同上誌同上号, 29頁

(19) 『綴方五年生』第2巻第3号の編集者が橋本憲三であることを考慮すると、橋本の妻・高群の名前を用いつつ橋本が担当した可能性がある。後述するように「感覚詩」にと

どまるべきではないとみる点で高群の評と橋本憲三「文とモデル」(同号所載)の趣旨が同一であることによる。

- (20)『綴方五年生』第2巻第3号, 21頁。
- (21)同上誌同上号, 21頁
- (22)同上誌同上号, 22頁
- (23)橋本憲三「文とモデル」同上誌同上号, 24頁
- (24)『綴方五年生』第3巻第3号(1932年3月号)32頁。
- (25)同上誌同上号, 1頁。
- (26)田中豊太郎「意味のある文(文話)」同上誌同号, 10頁。
- (27)同上誌同上号, 25~26頁。
- (28)同上誌同上号, 29頁。
- (29)『綴方五年生』第3巻第5号(1932年5月号)1頁。
- (30)同上誌同上号, 25頁。
- (31)同上誌同上号, 31頁。
- (32)同上誌同上号, 32頁。
- (33)『綴方四年生』第3巻第8号(1932年8月号)23頁。
- (34)寺尾正義「選評」同上誌同号, 31頁。
- (35)無署名「綴方のすきなみなさんへ」『綴方』第4巻第10号(1933年12月号)1頁。
- (36)同上。
- (37)前田光雄「日記をかきなさい」同上誌同号, 9頁。
- (38)同上誌同上号, 26頁
- (39)『綴方』第5巻第10号(1934年12月号)1頁。ただし, 本文と照合して執筆者等を補っている。
- (40)無署名「評」『綴方』第5巻第10号(1934年12月号)30頁。
- (41)この時期の『綴方読本』は1934年8月号まで定期発行したのち, 1935年1月号, 1935年5月号と不定期に発行して休刊となったようであるが, 詳細は未詳。
- (42)1934年10月26日付, 田川貞二宛の小砂丘書簡。高知県大豊町小砂丘忠義記念館所蔵。

(43)第1回目に相当するのは, 三木堅太郎「『綴方』研究の三大グループ - 『赤い鳥』『綴方倶楽部』『佳い綴方』」(『綴方生活』1934年1月号)。なお, 三木堅太郎は田川貞二の筆名である。

(44)井野川潔「綴方教育に於ける自由主義者」『綴方生活』1934年10月号, 38頁。

(45)井野川潔「文の研究 綴方の目のつけどころ」『綴方』第5巻第10号, 5~6頁。

(46)井野川は(44)の論文において「綴方に於けるリアリズムの問題が, 取扱はれ出したのは喜ばしい傾向であると言はねばならぬ。(中略)綴方の真の芸術性保有の問題が, 付随して研究されることを望む」(38頁)と書いている。

(47)『綴方』第5巻第10号, 26頁。

付記

1 本論文は, 日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(2)による研究成果の一部である。

2 史料閲覧にあたっては, 小砂丘忠義文庫(谷口龍三氏管理), 小砂丘忠義記念館, 大阪国際児童文学館, 宮城教育大学附属図書館, 玉川大学図書館の協力を得た。